

戸塚区民市

戸塚区民市は、戸塚駅西口商店街の方が地域活性化を目的として実施している朝市のことで、月1回戸塚区役所の駐車場でやっている。3年前にボランティアセンター横浜学生スタッフが区民市に参加したきっかけは、区民市を始めた商店街の方々に、「明学生に区民市の運営を手伝ってもらいたい」と誘っていただいたことであった。以降、私たちは、学生と地域の“わ”を広げることを目標としている。また、ボランティア未経験の明学生にボランティアの第一歩として、区民市の活動を紹介することも目的の一つである。私たちは、各商店の販売の手伝いや子どものための企画を行った。さらに、昨年度に続き明学ボランティアサークルの『JUNKO Association』、『あちょみだ』、『なんとかなるさ』、『Free ♥ Will』、『ぼけっと』が海外の支援国から買い付けた物品の販売を通して、地域との交流を行った。

昨年の反省としては、明学生への宣伝不足や、子ども企画への子どもの参加者数が少なかったことが挙げられた。これらを踏まえて、今年度は子ども向けのゲームコーナーを増設し、参加者数の増加を図った。また、区民市実行委員長の手塚さんと話し合い、商店街ミーティングへの参加、準備をスムーズ



に行うための区民市倉庫の掃除を行った。これらを通じて、区民市の反省とこれからの方向性について、商店街の方々とより密な意見交換ができたのではないかと思います。

今年度は成果として、子ども企画の進展、今年度から新たにボランティアサークルの『ぼけっと』が加わりにぎやかさが増したこと、

学内向けのチラシを作成し、区民市の宣伝を工夫できたことである。また、今年度の課題として、子ども企画の充実化を試みたものの、依然として子どもの来場者数が少なかったこと、メーリングリストを利用して区民市への参加を促したが反応が弱く、他のサークルへの宣伝がいきわたらなかったこと、明学生の参加者が少なかったことである。

これらの成果と課題を踏まえ、来年度は商店街や区民市により活気を出す為に、学生企画及び子ども企画を充実させること、一般の学生に区民市が魅力的なイベントだと思ってもらえるようなチラシの作成を行い、商店街の方とのコミュニケーションを大切にしながら活動を続けていきたい。

(横浜学生スタッフサブチーフ 国際学部国際学科2年 佐藤亜紀、経済学部経営学科1年 森健太)

大木農園

大木農園は、明治学院大学横浜キャンパスの近くにあり、大学に野菜を提供している農園である。大木農園で採れた野菜は、横浜キャンパス内の MG カフェのサラダバーや、学生食堂の肉じゃが等に使われている。普段から食堂を利用している明治学院大学の学生（以下明学生）にとってなじみ深い農園である。私たち学生スタッフは、昨年から引き続き、基本的には月に1度、繁忙期には月に2～3回程度、農園の手伝いをしている。作業内容は、草むしりや収穫などの軽作業が中心である。さらに、季節ごとの野菜を収穫したり、野菜の苗を植えたりと普通の学生生活では味わえない貴重な体験となっている。夏休みには、特別企画としてバーベキューを行った。明学生だけではなく、卒業生、アメリカのカリフォルニア大学からの交換留学生などが集まった。農作業後のバーベキューではみんなで楽しむことができ、改めて大木農園の魅力を再確認した。

一日中農作業をするとクタクタになるが、みんなで協力してきれいになった畑をみると、不思議と元気になる。1度参加した学生たちは、「また行きたい」「次はいつありますか」とボランティアセンターを訪ねてきてくれている。そのような経緯から、大木農園にまた参加したいというニーズに対応するため、今年から大木農園専用のメーリングリストを作成した。学生たちへの連絡がスムーズに行えるようになり、大木農園への参加がより気軽なものとなった。もともと多かったリピーターがさらに増加しつつある。



大木農園のオーナーである大木さんは、サラリーマンから農家へ転身した異色の経歴の持ち主で、サラリーマン時代の自身の経験を生かし、独自に防虫ネットを開発し、農薬を使わない、環境にやさしく安全な野菜作りを行っている。また、小学校から招かれ、食に関する授業を行うなど、積極的に地域に貢献している。私たち学生スタッフは、「大木さんの食に関する豊富な知識と経験を、小中学生の時、食の安全性の問題やファーストフードの危険性などといった食育を学んでいない現代の大学生に伝えてほしい」と考え、来年度以降に、大学にゲストとしてお招きしたいと思っている。

学生にとっては、大木さんの将来の夢や人生設計の話聞くことによって、将来の展望を考えるきっかけにもなっている。それは、大学を卒業してからも大木さんを再び訪ねる学生がいることから分かる。毎月お手伝いに行くことで、学生スタッフの距離も縮まり、大木さんから連絡していただけるようになった。学生にボランティアの参加を促すことも大事だが、それ以上に、ボランティア先のニーズに応えられるようになってきたことは大きな成果となった。今後もさらに学生の参加を呼びかけ、大木農園の魅力を知ってもらい、学生同士や大木さんとの交流を通して、多くのことを学んでいきたい。

(文学部英文学科2年 榎田有美)

どうせ登校するなら

この「どうせ登校するなら」という企画は、「どうせ登校するなら戸塚をきれいにしながら登校しよう」というコンセプトを持っている。キーワードは、「環境」「交流」「気軽」で、地域の清掃をしながら、ボランティアに興味のある学生たちが、気軽に交流できることを目的としている。私たち横浜ボランティアセンター学生スタッフは、5月の新学期開始以降に毎月一度、戸塚駅から明治学院大学横浜キャンパス正門までの道のりのゴミ拾いを行った。この活動の目的は、学生に気軽にできるボランティアを紹介すること、ボランティアに興味ある学生同志が交流すること、日頃お世話になっている戸塚に恩返しをすることであり、今年もそれらの点を重視しながら楽しくゴミ拾いを行うことができた。また、今年から活動の頻度を上げたことにより、昨年よりも落ちていたゴミの量が少なくなったと感じた。具体的には、昨年は可燃ごみと不燃ごみそれぞれビニール袋2個分、ビンとカンがビニール袋1.5個分ほどの量が落ちていたが、今年は可燃ごみと不燃ごみそれぞれビニール袋1個分、ビンとカンはビニール袋1個分と、ほぼ半減していた。集積したゴミの種類としては、駅周辺にはたばこの吸い殻や空き箱が多く、明学に近づくほど、缶やビン、コンビニで買ったおにぎりやサンドウィッチなどのゴミなどが多くなっていった。大学への通学路にこれほどゴミが落ちているということは、やはり学生がゴミを捨てていると思われるので、学生の意識改善を訴えていかなければならないとも感じた。活動を行っている途中に、近隣住民の方々に「おはよう」「がんばってるね」「お疲れ様」と声をかけて頂いた。また、夏休みに柏尾川



での清掃活動を行っていた際にも、柏尾川にいらっしゃった方々に声をかけて頂いた。柏尾川清掃時に集積したゴミは、カン、ビン、ペットボトルなどが多かった。夏休み中ということもあって、花火のゴミも多くみられた。今年度は「どうせ登校するなら」の開催回数を増やしたものの、一般学生の参加が



あまり見られなかった。来年度からは、ゴミ拾いという環境の面だけでなく、交流の面にも力を入れて、昨年度のようにゲストをお招きするなどといった工夫をしていけたらと思う。また、学生から「実施時間が早すぎて参加できない」という意見も多々受けたので、下校しながらゴミ拾いを行うという、「どうせ下校するなら」という企画も計画之中である。今後は学生のゴミのポイ捨てについての意識改善や、参加者の増加により一層努力していきたいと思う。

(国際学部国際学科2年 片貝茉由)

アジアの“わ”～明学で異文化交流してみませんか？～

「アジアの“わ”」とは、マレーシアからの正規留学生である学生スタッフの呼びかけで、2010年度の春から始めたものである。正規留学生は日本語を流暢に話しているので、外見からすぐに留学生と分かるわけではなく、また、いくら日本語が上手だからといっても日本の大学での生活は困らないとは限らない。日常の会話はスムーズにできるものの、正規留学生がキャンパスに一人で見かけたり、留学生から「明治学院大学での勉強や、同世代の日本人学生との文化の違いなどの悩みを相談できる人がおらず、学校からの正規留学生のための支援やイベントが少ないので、大学生活をあまり満喫できない」という話を聞くことがあった。

そこで始まったのが、アジアからの正規留学生が参加できるコミュニティづくりをするアジアの“わ”である。この企画は、お互いの国、文化、言葉などを分かりあうことで、留学生と日本人学生同士、また、正規留学生同士の接点を増やし、交流を深めてもらうことを目指している。

今年度最初の活動は5月に行われた。日本人学生とアジアの留学生合わせて80人程の学生が参加し、昨年アジアの“わ”の活動と、明治学院大学における正規留学生の実情について発表した。多くの学生が正規留学生と交換留学生のサポート体制の違いについて知らない事が多かったようで、真剣に耳を傾けてくれていた。

また6月には、留学生3人、日本人学生2人が、戸塚宿資料館にいらっしゃる馬場芳宏さんにガイドをしていただき、計6人で和気あいあいとした雰囲気の中、鎌倉宮方面に散策に行った。当日は馬場さんの案内で、鎌倉を散策し、行った先々では、それぞれの寺院にまつわる話を教えて頂いた。

また、春学期の間にフリートークをする機会が5回あり、それぞれ「学生生活」「カンボジアの学校を作る団体による発表」「各国の祭り」「サブカルチャー」について話し合った。それぞれのテーマで、日本人学生とアジア各国の留学生の間に学校での過ごし方、祭りのイメージの認識に違いがあったり、日本のサブカルチャーの話題で盛り上がりたりなど、大変充実し、かつ楽しいフリートークができた。

7月には、地域交流の拠点となる倉田コミュニティハウスの調理場や多目的ホールを貸していただき、七夕パーティーを開いた。当日は、30名を超える参加者が集まり、用意していた短冊に、参加者それぞれの願いを込め、アジアの“わ”のスタッフが作ったおいしい麻婆豆腐、手巻き寿司、チヂミ、わかめスープなどをみんなで食べつつ、おしゃべりしながら各々が楽しい時間を過ごした。他の文化の人たちと交流したことで、自分の知らなかったアジアの文化に触れることができた。

10月には、戸塚散策とハロウィンパーティーを行った。戸塚散策では、鎌倉散策でお世話になった馬場さんにガイドをしていただきながら、旧東海道沿いの石碑や神社、寺院を散策した。宣伝不足により参加者が少ない状態での実施となったが、今まで知らなかった戸塚の歴史を知ることができた散策になった。

ハロウィンパーティーでは各々が好きな仮装をし、イス取りゲーム、ツイスター、ビンゴなどのゲー

ムをして交流を深めながら楽しむことができた。少人数ではあったが、そのおかげで深く交流することができた。その後もアジアの“わ”のイベントに参加してくれるリピーターの獲得ができた。

11月には、横浜校舎の体育館でスポーツ大会、及び明治学院大学の先生の畑をお借りして、アジア風の味付けで楽しむアジアンバーベキューを実施した。これは留学生や違う学年の日本人学生同士が分け隔てなく交流しようという目的で企画された。当日は、1年生から4年生までが年代や国籍を問わず、誰もが知っているバスケットボールで汗を流して楽しんだ。アジアンバーベキューでは、韓国のたれを用意し、肉にはちみつとバターを塗るなどをして、アジア風のバーベキューを演出した。バーベキューの用意や調理をする際は、留学生、日本人学生、アジアの“わ”のスタッフ皆で協力し、それにより話すきっかけが生まれ、よい交流ができた。

また、11月下旬から12月上旬に横浜校舎10号館1階ラウンジで、教養教育センター主催の「2011年アジア文化祭写真展」が行なわれた。この写真展は、アジアに関わる活動をするボランティアサークルや団体が、それぞれ写真展示と活動紹介をし、明学生にアジアの文化と問題について知ってもらうことが目的である。今年参加したのは、『JUNKO Association』、『ハビタット MGU』、『あちょみだ』、『Peace ☆ Ring』、『Free ♥ Will』、『なんとかなるさ』、『ぼけっと』、『こ・こ・ろ』、『MG パール』、横浜ボランティアセンター学生スタッフ（アジアの“わ”、「Do for Smile@東日本」プロジェクト）、斎藤百合子教授ゼミの計11団体であった。東日本大震災やタイの洪水等、アジア各国の問題を取り上げ、活動を紹介できたことが、来場者数を増やしたことにつながったと思われる。昨年よりも多くの参加があったため、当日までの予定や事前ミーティングについて全団体と連絡を取ることがスムーズに進まず、写真展開催日になっても準備ができていない団体がいくつかあったという課題も残ったが、多くの学生が日本を含むアジアの文化や問題に興味を抱く良いきっかけとなるよう来年も開催したいと思う。

12月は、中国、韓国、台湾、日本、マレーシア、アジア各国のお茶を用意して、それらを飲み比べながら留学生と交流することを目的としたアジアのお茶会を実施した。留学生の参加が少なかったものの、普段あまり飲む機会のないアジア各国の美味しいお茶を堪能し、それを通して異文化に触れ、充実した交流ができた。

アジアの“わ”の活動は2年目になり、ボランティアセンターの学生スタッフだけでなく、一般の日本人学生、留学生もアジアの“わ”のスタッフになったことで、活動が少しずつ広まっていることが強く感じられた。今後も沢山の人が参加してくれるような魅力ある企画をスタッフで考えたり、またアジアの“わ”を知らない学生たちに広く知ってもらうために、国際交流センターにも協力していただけるよう働きかけたりなど、正規留学生と日本人学生にとって良い交流の場をつくるために活動していきたい。

(国際学部国際学科2年 齊田未来)

ボラフェスタ in KANAGAWA 2011 への参加

私たち横浜学生スタッフは、10月1日に日本赤十字社神奈川支部が主催する「ボラフェスタ in KANAGAWA 2011」（以下ボラフェス）に参加した。これは、神奈川県内でボランティア活動を行っている12大学の学生たちが、ボランティアを通して献血促進を呼びかけるためのイベントである。また、私たちにとっては、日頃ボランティアを行っている地域や大学以外の場所で活動紹介を行う事ができる機会でもあり、他大学との交流をはかることも目的としている。

今回の目標献血者数は150人としていたが、学生たちの呼びかけの効果もあり、それを上回る171人の方にご協力いただき、目標を達成することができた。横浜学生スタッフは、自分たちの日頃の活動紹介と昨年に引き続き「ボトルキャップアート」を企画した。これは、明治学院大学でもボトルキャップ収集が行われているため、ボラフェスを通じて、ボトルキャップ回収企画をより多くの人に知ってもらおうと企画したものである。ボトルキャップは、800個集めると1つのワクチンに交換され、途上国に寄付される。今年は、赤十字のマスコットキャラクターである『けんけつちゃん』のデザインで、来場者の方と一緒にボトルキャップアートを作成した。キャップを指定されたところにつけるという簡単な作業だったためか、他の大学よりもたくさん子どもたちが私たちのブースに集まってくれた。そのため、多くのスタッフが小さな子どもと会話をしつつ、楽しくボトルキャップアートの制作をすることができた。当日にもキャップを収集し、来場者の方の持ち込みも含め、最終的にはワクチン40個に相当する約3万2千個ものキャップを集めることに成功した。

ボラフェス全体の企画としては、イメージソングである夏川りみさんの『いのちのリズム』での手話歌が行われた。手話歌は、総勢約80人もの大学生が参加し、ボラフェスの中で最も注目を集める企画となった。そして、献血促進の一環として「ボラフェスタ献血大使」の選抜が行われた。献血大使の企画は今年初の試みで、候補学生のボランティアへの思いや献血促進への呼びかけなどのスピーチのあとで、参加学生や来場者の方々によって投票が行われ、横浜学生スタッフのメンバーが大使に選ばれた。大使は、ボラフェス後の大学内での献血呼びかけ等で活躍している。また、今回は東日本大震災をうけて震災ブースを設け、各大学の現地でのボランティアの紹介をした。横浜学生スタッフからは、「Do for Smile @東日本」プロジェクトの活動を紹介し、現地での写真を展示した。

課題としては、ボラフェスの参加学生の間で行われている交流会に、授業などの関係で出席できなかったために、十分に他大学との交流がはかれなかったことが挙げられる。しかし、ボラフェス後も他大学の学生に対して、ボランティア募集などの呼びかけがお互いにできたことなどを考えると、昨年と比べ学生間の距離を縮めることができたと思われる。また、献血促進に関しては、上述のように大きな成果をあげることができた。ボラフェスは、新たな人脈を増やし視野を広げることのできる絶好の機会である。これからも積極的な姿勢をもって参加することが重要であると感じた。

(横浜学生スタッフサブチーフ 社会学部社会福祉学科2年 鈴木美鳥)

横浜市立倉田小学校との交流

ボランティアセンター学生スタッフは、今年度から横浜市立倉田小学校（以下倉田小）との本格的な交流に取り組み始めた。新学期を迎える直前の2011年2月に、現在の6年生を横浜キャンパスに招き「キャンパスツアー」を実施したことを皮切りに、総合学習の授業や運動会などの行事に関わってきた。

この活動の最大のねらいは、倉田小との交流を通して、明治学院大学（以下明学）と地域の関係をより身近にすることである。倉田小は、明学から徒歩1分程の距離にある。また、小学校には生徒や保護者だけでなく、多くの地域の方々が出入りしているため、この活動は明学と地域の相互理解にもつながっている。また、交流の過程は、相互の活動や学びの機会を広げるものになっている。普段の活動に「大学」、「小学校」の要素が加わることで、新しい可能性が生まれてくるのである。

今年度の活動は、前述したものに加え、倉田小を会場にして行う地域の防災訓練への参加や、「防災マップ作成」の活動（詳細は本報告書120ページ参照）も行った。これは、3月11日の地震を宮城県で経験した学生スタッフの発案で、登下校路の防災マップを作成するというものである。さらに、6年生担任の先生からの依頼を受け、明学のボランティアサークル『なんとかなるさ』、『あちょみだ』、『JUNCO Association』、『ぼけっと』の4団体と連絡を取り、総合学習の授業に参加をしてもらった。これらの授業は、それぞれのサークルの活動を通して国際協力を考えるというものである。普段はあまり聞かない国際協力の話や、より年齢に近い大学生の体験談として聞き、最終的には小学生が主体となり、サークルの活動に参加することになっている。11月にはこれらの交流をふまえて、校長先生から特別支援学級の手伝いのお話があり、学生スタッフの新しい活動として定着しつつある。

今年度の活動を振り返ると、倉田小の行事に参加することは、学生スタッフだけでなく、倉田小や明学のサークルにとって、新たな活動を始めるきっかけになっていると思う。そして、私たちが年間を通して関わりを持つことが、「明学と倉田小をつなぐパイプ役となる」という大きな役割を担っていると感じている。少しずつではあるが、私たちの活動が小学校を通して地域にも認知されつつあると校長先生からは伺っている。こうして新しい取り組みや関係性づくりを通して、充実した結果が得られたと感じている。しかし、明学内ではあまりこの交流が知られていないのも事実である。

今後の課題は、この関係を持続しつつ、学内での広報活動も強化し、パイプ役としての役割をより確立していくことである。また、1,2年生が多い横浜学生スタッフにとっては、午前中に授業がある小学校との交流は、人数を集めるという面で非常に難しい部分があった。今後はこの経験を生かして、より私たちに合った関わり方を模索していかなければならない。

こういった輪が広がり、明学が地域に欠かせない存在になり、倉田小が明学生に欠かせない場所になることを期待している。

(国際学部国際学科4年 砂川朝暁)

子どもボランティア企画

ボランティアセンターを訪れる学生のなかには、子どもと触れ合う機会を探している人がたくさんいる。しかし、横浜ボランティアセンターの学生スタッフが取り組む子どもに関する企画は、小学生を対象とした「倉田小学校との交流」のみであった。また、「未就学児と触れ合いたい」と希望する学生はスタッフのなかにも多くいた。そういった経緯から立ち上げられたのが、未就学児を対象とした「子ども企画」である。

子ども企画では、将来幼稚園や保育園での仕事に携わることを目指す学生たちが、経験を積む場となるように、また、子どもとの触れ合い以外の業務をお手伝いすることで、職員の方々の負担を減らせるように、といった参加者・活動先の人々、双方にとって有意義な活動となるように心がけている。そして何よりも子どもたちに、大人でも子どもでもない“大学生”という日常的に関わる機会の少ない人と交流する機会を持ってもらい、子どもたちに良い刺激を与えられるような活動を目指していきたい。

現在は、多くの人が参加の機会をもてるように、平日の受け入れが可能な東戸塚の「川上保育園」と、休日の受け入れが可能な戸塚の「はあとハウス」の2ヶ所を拠点とし、月に2回程度活動している。主に子どもたちと外で遊んだり、職員の方々のお手伝いをしたりという活動を行っている。

今後の課題としては、活動後の反省会において、「子どもの間で問題が起きた時の対応に困った」という感想があがったため、職員の方々とお話をする場を設け、対応の仕方などを学べるようにして、より良いボランティアを目指していきたいと考える。

来年度は、これまでの活動を通して築いてきた関係をより深いものとし、さらに、一般学生の声を反映していけるような活動を心がけていきたい。

(法学部政治学科2年 山田安希)

東日本大震災復興支援街頭募金

2011年3月11日に発生した東日本大震災、甚大な被害を目の当たりにした私たち横浜学生スタッフは、「地域の方々も一緒に気軽に参加できる支援は何だろうか」「自分たちに何か出来る事はないだろうか」と話し合った。その結果、募金活動を行うことを決めた。震災の影響で休校となった4月を中心に戸塚駅で、警察の許可を得て7日間実施した。午前と午後に担当を分け、1日中声を出し合いながら道行く人に協力を呼びかけた。被災地が大変な事態に陥っているのは、毎日映像が流れていて知ってはいたが、同情して暗い気持ちになるのではなく、明るく楽しく前向きに取り組もうと話し合い、自分たちに出来る活動をやっ払いこうと考えた。地域の方々のご協力のおかげで、26万8565円の募金を集めることができた。また、活動中に地域の方々に声をかけていただく機会も多く、近隣住民の方々と明学生の交流の場にもなった。今後、この募金活動で支援を終わらせる事なく、継続することが大切だと感じた。これからも現地の人の声を聞き、関心を持ち続けていきたい。

(社会学部社会学科2年 高木結衣)

広報

横浜ボランティアセンター学生スタッフは、今までボランティア活動参加のための宣伝活動は行ってきたが、ボランティアセンター自体の宣伝には十分に力をいれてこなかった。しかし、ミーティングを重ねるなかで、「センターの宣伝活動に力を入れることは、学生のボランティア参加を呼びかける上で重要なことではないか」という案が出され、今年度は広報を新設した。まず、今までおこなってきた広報の仕方などを見直すことからはじめた。学生スタッフの企画している活動の宣伝強化、また学生スタッフ自体の認知度をあげることで、より多くの学生にボランティアの機会を知ってもらうことを目的としている。加えて、ボランティアセンターをより身近な場所として感じてもらうことも目指している。

昨年度まで作成してきた「ボランティアセンター通信」（以下ボラ通）に加え、新たに Twitter を宣伝ツールとして取り入れた。これによって、リアルタイムな活動予定の宣伝・活動報告が行えるようになった。

また、ボラ通の形式も今年から大きく変更した。今まで春秋1度ずつ、活動報告形式のものを発行してきたが、「次のボランティアの予定を順次知りたい」という意見を参考に、ボランティアの予定をメインに記載したものに改善した。サイズもチラシサイズにすることで学生スタッフがボラ通を持ち歩き、友達やボランティアに興味をもった学生に、気軽にボランティアを紹介することが可能になった。

現在では、ホームページ（以下 HP）の改善を試みている。シンプルかつ内容が多く盛り込まれた HP を目指して、レイアウトの工夫をしたり、ポイントとなる箇所をわかりやすくしていきたい。

ボラ通の改善によって、ボランティアセンターを訪れた学生に、ボラ通を見せながらボランティアを紹介できるようになった。しかし、まだ改善が必要な点も多くある。ひとつは Twitter の認知度が低いという点だ。ほかに、HP や Twitter などのツールを活かしきれていないことが挙げられる。

先述したように、Twitter の認知度が低いという問題点がある。今後はボラ通、HP を使って Twitter の宣伝もおこないたい。ツールを活かしきれなかったという反省点については、広報だけでなく各企画にも HP や Twitter の使用頻度を高めていくように促していきたい。また新しい宣伝手段として口コミも強化したい。口コミの成功事例として、学生スタッフ企画の「大木農園」や「アジアの”わ”」が挙げられる。参加した学生には「友達に誘われて参加しようと思った」という学生が多く見受けられた。この例から口コミも宣伝手段として有効なものだと期待し、積極的に伝達していきたい。

今年度は、様々な広報ツールの改善・開拓をおこなってきた。次年度からはこれらのツールを活用して、より多くの明学生に、ボランティアに参加をしてもらえるようにしていきたい。

(国際学部国際学科2年 坂本夏菜)

2011 年度横浜学生スタッフによる活動のまとめ

ボランティアセンター横浜学生スタッフは、2011 年度も前年度に引き続き戸塚地域に密着したボランティアから国際ボランティアまで、幅広いジャンルのボランティアに取り組むことができた。「戸塚区民市」、「大木農園」、「どうせ登校するなら」などの前年度から引き継いだ企画はさらなる発展に向け、地域の方々との話し合いの場を設け、学内では一般学生への参加促進を行うなど、今後に繋げられる活動ができた。10 月には、日本赤十字社神奈川支部が主催する「ボラフェスタ in KANAGAWA」に参加し、赤十字の方々や他大学との交流や、横浜学生スタッフの活動紹介を行った。今年から始まったボランティアセンター主催の「1 Day for Others」にもさまざまなプログラムにリーダー学生として参加した。そして、今年度から新たに「子どもボランティア」企画もスタートさせた。現在は活動先へ定期的に訪問し、子どもたちと交流を深めている。来年度も一般学生参加に向けた活動を企画し、発展していくことを期待している。さらに倉田小学校とも「防災マップ」など、総合学習のお手伝いを通して交流を持つことができ、新企画を進めていく上で、良い経験となった。昨年度よりスタートしたアジアの“わ”も、パーベキューや鎌倉散策などより活動の幅を広げたことで、留学生と日本人学生の交流を深めることができた。



今年の活動は、3月11日に発生した東日本大震災の影響で3月に予定していた春合宿を中止せざるを得なくなり、学生スタッフ主催の企画にも中止や延期が相次いだ。新年度に向けての準備が十分でない状態でのスタートとなり、当初は当惑することも多かった。しかし、新学生スタッフの加入後、各企画開始に向けた話し合いを行ううちに、活気を取り戻すことができた。そして、今年度は「学内のボランティアサークルと一般学生を繋ぐ」ことを目標に MGVA (Meiji Gakuin Volunteer Association) という活動を立ち上げた。現在は、実現に向けての調整を行っている段階で、今後は各ボランティアサークルの代表者たちと打ち合わせを重ね、一般学生との交流方法等を考えていきたい。

2011 年は、人と人との絆を考えさせられる年となった。私たち学生スタッフも、1年間“いま、自分たちにできること”を常に考えながら、ボランティア活動を行ってきた。

これにより今年度は、例年以上に学生自身が積極的にボランティア先へ訪問し、活動することができていたように思う。学生スタッフのみで新企画開始に向けた準備を行うことができたのも、良い経験になった。来年度も、学生スタッフがボランティアセンターと学生の架け橋として活動し、発展していくことを期待している。

(横浜学生スタッフチーフ 社会学部社会福祉学科2年 眞木瞳)

小田急コスモスの思いと活動

小田急コスモスは、横浜キャンパス北門に隣接した小田急分譲地にて、学生と地域住民の交流を図ることを目的とした学生グループで、ボランティアセンターと協働しながら、活動を行っている。

小田急コスモスの活動のコンセプトは、大きく分けて地域交流と世代間交流の二本柱から成る。まず、一つ目の柱である地域交流は、「明治学院大学の学生が、地域とつながりを持つことにより、その地域に貢献できることがあるのではないか」という考えである。地域内のつながりが希薄化したと言われる現在、学生が地域に関わらせていただくことで、地域住民間の交流がより活発になればという思いがある。二つ目の柱である世代間交流は、高齢者や学生、子ども世代等の交流が進むことで、お互いに良い影響が期待できるという考えである。他の世代との関わりがほとんどないと言われる学生が、様々な世代の人と交流することにより、新しい知識や刺激が得られ、学生の視野が広がり、多面的な考え方ができるようになると考えている。地域の高齢者の方や子どもたちが、大学生と話をすることで、新鮮な気持ちになれることも期待している。このように、互いに刺激し合い、互いが活性化するのではないかという思いがある。以上のようなコンセプトに基づき、今年度は主に「サロンすみれ」、「しあわせの会」、「お祭りへの参加」を中心として活動した。

「サロンすみれ」では、小田急分譲地の住民の方たちが月に二回、地域の高齢者の方々とお茶を飲みながらお話をするという活動を続けている。私たち学生は、一人暮らしをする高齢者の方々の孤独感を軽減することや、明治学院大学に対して親近感を持ってもらうことなどを目的として活動している。今年度は、新たに入った一年生のメンバーを知って頂くことから始まり、秋には持ち込み企画として、一年生のメンバーで「おりがみ講座」を企画した。この企画は、毎月の集まりの中で昔懐かしい遊びを取り入れることにより、リフレッシュしてもらうことを目指し、考案したものである。具体的におりがみとした理由は、指先を使うことが認知症予防に繋がることや、みんなに馴染みがあることなどが挙げられる。実際に講座を実施し、良かった点や反省すべき点などが発見できた。良かった点としては、世代を超えた共通の遊びを通して話が弾み、「私たちが子どもの頃はね」などと話して下さる姿が見られた。また、「家でもやってみるわね」という声を頂き、一人暮らしの方々に自宅での時間を有効に使ってもらうことができた実感した。反省点としては、折り方の説明が書かれた紙を配布した後は、各自で進めていただき、折りながら楽しくおしゃべりをしていただこうと考えていたことが挙げられる。実際は、その紙を見ても、細かい字で書かれた説明が読めなかったり、自分がどこまで進んでいるのか分からないという声が多かったため、こちらで随時説明を加えることが重要であったと学んだ。



「しあわせの会」では、月に一回地域の高齢者の方々と一緒に食事をするというデイサービスに参加し、

実際に料理を手伝ったり、高齢者の方々とお話ししながら食事をしたりといった活動をしている。一人暮らしの高齢者の方や料理が作れない高齢者の方などをサポートするという試みである。私たちは、地域の主婦の方と高齢者の方との交流の中に学生が入ることで、更に交流の輪が広がることを目的に活動している。また、学生が料理を通して楽しみながら地域と関わる事ができるユニークな活動にしていくことも目指している。活動を通して、



高齢者の方とはもちろん、主婦の方々と交流が広がったと実感できた。私たち学生は、普段教わる機会の少ない料理を学ぶ喜びを、一方で主婦の方々は自分の知識を人に教える喜びを得ることができたと感じている。

横浜キャンパス北門近くの公園で行われた夏祭りには、地域のことを知り交流を図ること、普段サロ



ンすみれで会っている方々といつもとは違う形で交流するという目的を持って参加した。しかし、当日は予想以上に地域の子どもたちが多く参加しており、普段関わる機会がなかった子どもたちとの交流を持つ機会が得られ、新鮮であった。出店を手伝ったり盆踊りを踊ったりする中で、地域の方々の暖かさを感じることができた。

今後の活動については、これまで培った活動を長く続けていくことを大切にしていきたい。また、「サロンすみれ」に参加する高齢者の方の人数が減っているため、周辺住民への呼びかけなどもやっていきたい。「サロンすみれ」では、今年度中に「1 Day for Others」で習ったハンドマッサージを参加者の方々に行うことも企画している。「しあわせの会」では、地域の一人暮らしの学生を取り込んで、新たな交流の輪を作りたいと考えている。

そのためにも広報活動などを工夫していきたいと考えている。ボランティアセンターのホームページに掲載やブログの作成を通じて、コスモスのメンバーだけでなく、活動に興味を持った一般の学生も参加しやすいような学生グループを目指している。

地域のつながりから生まれる相互扶助の仕組みが昔は当たり前であったが、現在はその相互扶助が解体していると言われている。私たちは、「ボランティアという形で学生が媒体になることによって、相互扶助の形が再現される」ことを目指して活動していきたいと思う。

(社会学部社会福祉学科1年 鎗田桃子)

2011 年度を振り返って

今年度は、横浜キャンパスのボランティアセンターの新たな可能性を探る年となった。これまでは新入生がまず在籍する横浜キャンパスの特徴から、本学の教育理念“Do for Others”への理解を深めるための導入的活動及び大学・学生・横浜キャンパス周辺地域との協働とそれによる学びを推進する機能を主に果たしてきた。そうした活動を基盤として、今年度はセンター全体の事業として新たに「1 Day for Others」（詳しくは 42 ページを参照）や東日本大震災への復興支援活動（詳しくは 8 ページを参照）が加わり、センターの使命や役割の拡大が図られた。「1 Day for Others」の当日、リーダー役となった学生スタッフらの生き生きとした姿は、学生スタッフ育成と役割の拡大の新たな可能性として感じられた。こうしてセンターの活動が広がるなかで、これまで以上に多様な学生たちが、センターと関わり活動することになった。多くの学生が新たな環境のなかで、常に最善の方法を考えながら活動に取り組み、力を発揮してくれていたことに心からの敬意を表したい。

これまで取り組んできたキャンパス周辺地域と協働した 8 つの活動（戸塚区民市、柏尾川魅力づくりフォーラム、小田急コスモス、大木農園、倉田小学校との交流、Ange とのコラボレーション、どうせ登校するなら、とつかプロジェクトとなる。プロジェクトの詳細は HP 及び学生からの報告を参照）は、定着化し、多くの活動において、学生スタッフらによる積極的な呼びかけで活動が広がっている。今年立ち上がった子ども企画については、近年戸塚地域で増加している子どもたちやその親に対する支援活動としても、更なる活性化を目指したい。

東日本大震災経験を生かした活動にも取り組んだ。宮城で震災を経験した学生スタッフが倉田小学校の総合学習の授業で、防災マップを作成をした。さらに、倉田小学校の児童と本学の学生と一緒に戸塚駅前に立って、被災地支援の募金を行うなど、倉田小学校の児童が学校をとび出し、地域をフィールドに活動を展開するきっかけも作ったことと思う。12 月には、センターが東日本大震災の復興支援として関わりをもってきた岩手県大槌町の吉里吉里小学校 PTA 会長が倉田小学校を訪れ、3 月 11 日の津波襲来時の状況、子どもを含めて関係者が一丸となって救援活動に取り組んだ様子などを聞かせていただいた。実体験をもとづいたお話から子どもたちは「津波の被害の深刻さ、自分たちの身を守ることの大切さ」について理解するようになったという。こうした活動を通じて、横浜地域で大規模災害が起きた際に地域で支え合える、強いコミュニティづくりにセンターが役立てることも期待している。

横浜キャンパスのボランティアセンターは、コミュニティにおける「つながり」づくりを軸として、学生とともに地域活性化に取り組んできた。今後はこれまでの活動を基盤にしながらも、センターに対する社会的なニーズに対応しながら、さらにその役割が拡大・発展していけるように努力を続けたい。

(市川)

地域密着型プログラム「とつかプロジェクト」

昨年度から始まった「とつかプロジェクト」は今年度からボランティアセンターの主催事業として位置づけられた。本年は実施2年目となり、昨年度の課題を踏まえプログラムのテーマや手法などについて、より明確化を図った。プログラムを主催する戸塚区社会福祉協議会やとつか区民活動センターの担当者と話し合い、今年度のコンセプトは「共生社会の構築に向けて、学生が戸塚地域のボランティア活動、市民活動への現場での活動に参加し、学びを深めることで、地域と学生がともに地域社会の課題に取り組むことを目指す」となった。

今年度は法学部、社会学部、国際学部、心理学部から合計9名の参加があった。活動先は、これまで協力をしていただいた『ドリームハイツ地域運営協議会』、『大木農園』、『上倉田地域ケアプラザ』に加えて、今年度から『とつか区民活動センター』、『東戸塚活動ホームひかり』、『とっとの芽』、『教育支援協会（川上小学校はまっ子ふれあいスクール）』が加わり、合計7団体となった。

参加学生は、7月上旬に「お見合い会」（受け入れ団体と学生の顔合わせ）と、8月上旬にオリエンテーション（地域課題や学生と地域の協働の実態と課題について学び、活動目標を立てる）で事前学習に取り組んだ。8月、9月には上述の7つのフィールドにて、7日～10日間の活動を行った。8月末に学生は『善了寺』と『倉田小学校』に訪れ、お寺や学校等が進める共生に向けた取り組みを学んだ。11月には活動の成果と学びを発表する報告会を開催した。参加学生は受け入れ団体ごとに、それぞれのどのような地域のニーズに応えながら活動を展開しているかを紹介した後に、活動から得た学びについて、発表をした。大木農園で活動した学生は「大木農園はつながりの中心になっていて、明治学院大学の学生や卒業生をはじめ、大木さんのお孫さん、近所の主婦の方など、様々な年代の交流が生まれていた。これまでは農業はきつだけのイメージだったけれど、地域内でのコミュニケーションの場として活用できることができると学んだ」と報告された。川上小学校のはまっ子スクールで活動した学生は「教職の授業で子ども個性を育てることが大切と教わったが、その意味がよく理解できた」と地域での経験と大学での学びが有機的につながっている様子についての報告があった。

今年度はフィールドでの活動経験がどのように学生のなかで学びとして定着しているのかについて、可視化を図るための工夫を試みた。プログラムの前後に、学生の能力や地域社会への理解等について自己評価をワークシートに記入してもらったところ、多くの項目で変容が見られた。特に「地域や社会への関心」、「コミュニケーション能力」、「行動力」については、シートに記入した学生全員が高まったと回答していた。プログラムのねらいとする、活動を学びとして昇華すること、地域社会の課題を理解し、解決のために活動する力は向上していることが伺えた。

最後に今年度プログラムの実施にあたり、学生の指導を丁寧にしていただいた、受け入れ先の皆さまに厚くお礼申し上げたい。来年度に向けても改良を重ね、プログラムを通じて学生が地域社会に貢献し、さらに学生の学びと成長が促進されるよう、努力をしていきたい。

(市川)